梟

2月26日

Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

2月26日のおはなし「梟」

　仲間と思って呼び続けていた。本当は自分の声のこだまなのに。

　ホッホー、ホッホー、ホッホー。森の奥から聞こえてくるのはアオバズクだった。どこにいるのかはわからなかった。わかりようもなかった。さっきまで斜面の下の方から聞こえてくると思っていたのが、気がつくともっとずっと遠くから聞こえるような気もする。山道をうねうねと歩いているので、正確な位置関係などわかるはずもないのだ。

　わたしにはそれが夢の中のできごとだということがわかっていた。ちっともかまわなかった。しばらくこのままこうしていられるのなら。そう。山の中を歩いているのはわたし一人ではなかったのだ。兄がわたしのすぐ後ろを歩き、時おり話しかけてくれた。昔のままの飄々とした話し方で、最近あったおかしなできごとを教えてくれる。

　それがさ、そのばあさんが手を離してくれないわけさ。いや、おれもう、ここで行きますんでって言っても握った手を離さない。相変わらずじっとおれの手を握ってるわけさ。そのうちだんだんだんだんその手の力が強くなって来ておれも、イタい、イタい、イタタタタタ、イタいッて！って思わず叫んだところでばあさん、ほなずーっとわたしとイテくださいとぬかしやがった。

　ほんまやの、それ？　こわいんか、おもろいんか、ようわからん話や。わたしはなぜか関西の方の方言でしゃべっていた。にいさん、話、つくってんの、ちゃうん？　つくってなんかいないさ。兄が、まるでひと昔前のアクション映画の俳優みたいに妙に気取った口調で答えるのがおかしい。おれが話しているのはすっかり実際にあったことばかりさ。

　ホッホー、ホッホー、ホッホー。あっ。梟や。ああ、あれはアオバズクの声だね。アオバズク？　夢の中のわたしは初めて聞いた名前のように鸚鵡返しにつぶやく。よう知ってんなあ、けったいなこと。まあね、研究してるからね。研究って、何してんの最近と言おうとしてわたしは不意に兄がもう生きていないことを思い出した。別に思い出したからどうと言うことはない。最初から夢だとわかっていたし、兄がそこにいることが夢の証拠だと思ってもいたから。

　そうだね、おれの研究は主に金融工学の解体だ。キンユウコウガクノカイタイ？　思わず聞き返すと兄はもう、これ以上爽やかな声は出せないというくらい爽やかな声で、だってコカ・コーラをもうこれ以上飲めないだろう、仮に体重が190kgあったとしてもさ。190kg？　わたしは素っ頓狂な声で聞き返す。にいさん、そないに太ってんの？　仮にさ、仮にと言っている。

　そういえばさっきからずっと話しているのに、わたしは後ろを振り返らず歩いていたので、兄がどういう姿をしているか見ていないことに気づいた。兄は190kgもある巨漢になってしまったんだろうか。そんな兄の姿を見たくはない。昔のままの兄ならいい。でも、と、わたしは考え直す。だったらわたしの方が年上になってしまう。それはいやだ。

　想像はとりとめなくふくらむ。兄がもしもっと違う姿になっていたらわたしはどう思うだろう。急にわたしはこわくなってくる。たとえば生まれ変わった全然知らない人の姿で歩いていたら。あるいは死んでから経った年数分、朽ち果てた姿で歩いていたら。こういう時にいい想像は働かない。わたしは後ろを見るのが恐ろしくなる。いや、自分が振り返って見てしまうのではないかという思いつきそのものが恐ろしくなってくる。

　振り返ってはいけない。そうだ。兄が死ななかったらなっていたであろう年齢なりに年をとっていてさえ、わたしには受け入れられないかもしれない。なのにわたしは振り向かずにいられないことを知っている。ああ、おまえ。アクションスター気取りの兄の声がすぐにかぶさってくる。いけない。振り返っちゃいけないよ。なんで？　わたしは少しすねた声で言ってみる。なんでもさ。振り返ると幸せは逃げて行く。

[illegible]

　もう！　と言って振り返ると、そこには誰もおらず、誰もいないことにわたしはうちのめされる。頭上でばさばさっと羽ばたきがして、あわてて見上げようとするが、夢の中のわたしの動きは緩慢で何も見つけられない。ホッホー、ホッホー、ホッホー、とアオバズクが鳴き、わたしはそれがアオバズクの鳴き声だと言うことを忘れないでおこうと、必死になって自分に言い聞かせている。

（「190」ordered by sachiko-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro）

感謝の言葉と、お願い＆お誘い

　Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？　もしも気に入っていただけたならぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブクログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

　「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそこのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただけると大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできるようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

　現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→公開中の作品一覧

　SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「Sudden Fiction Project Guide」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

　ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、Facebookページなどに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

　読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

　10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「急募！お題　この秋Sudden Fiction Project開催します」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！　はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

　こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひご一緒に盛り上がってまいりましょう。

梟

http://p.booklog.jp/book/45164

著者：hirotakashina
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/45164

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/45164

公開中のSudden Fiction Project作品一覧
http://p.booklog.jp/users/hirotakashina

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.